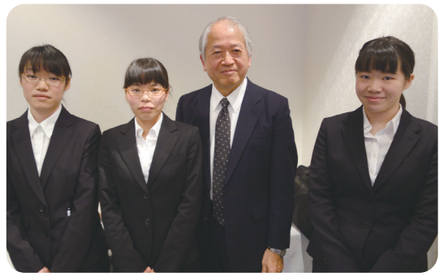
確かな知識と技能を身につける

平成9年の学科開設以来、卒業生の約8割が県内で就職しています。3・4年次には1・2年次で学んだことをもとに、個人研究として卒業論文を作成します。また、県内外から著名な大学教授を非常勤講師として招へいしており、高度な専門分野の講義も特徴です。



全国に連携施設、安心の臨床実習

1～2年次は病院見学、3年次では臨床見学実習を、4年次には長期臨床実習を実施します。実習指導者の約半数は卒業生で連携が取れており、実習の修了率は100%です。患者さんのビデオを見せ、言語聴覚士の重要なスキルの一つである「評価」が適切にできるように補講します。また、同一法人の幼稚園児が3年次に来校して、遊びながら子どもの発達を学ぶ実習もあります。

最新の教育設備で学ぶ

最新の検査機器を導入し、臨床現場に向けて演習します。主な設備は乳幼児聴力検査装置をはじめ、音声分析装置、ビデオシステムのある防音室、各種の検査道具を備えています。精密なデータをとる重要性や、患者さんの能力を最大限に引き出す適切なアプローチを学びます。

国家試験合格への充実した指導

1年次より少人数制ゼミ形式で指導し、国家試験に向けた対策も、特に4年次には学科全体で進めていきます。担任制のメリットとして、定期的な個人面談も行い、一人ひとりの到達度に応じた学習指導を行っています。

過去10年平均 本学院 国家試験 合格率 68.7%

過去10年平均 全国 国家試験 合格率 66.0%

言語聴覚士が活躍する場

言語聴覚士の約7割は、医療機関のリハビリテーション科に所属しています。女性の割合が多いリハビリテーション専門職で、ほかにも介護福祉施設、教育機関など活躍の場は多様です。

対　象

こどもから高齢者

活躍のフィールド

医　療

リハビリテーション科・耳鼻咽喉科・小児科・形成外科・口腔外科など

介護・福祉

障がい者福祉センター・小児療育センター・通園施設・介護老人保健施設など

学校教育

言語聴覚士養成校・ことばの教室・ろう学校など

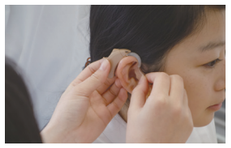
保健・行政

1.6才健診・3才児健診など

対応する障がい

聞こえの障がい

音が十分聞こえないため、会話が困難。先天性の場合、ことばの習得に支援が必要です。



話しことばの障がい

発音や発声がうまくできなくなると、会話による意思疎通がむずかしくなります。

言語機能の障がい

発達が遅れる、脳の損傷でことばが出てこない、意味の理解などへの障がい。

高次脳機能の障がい

注意力や記憶力の低下、あるいは見ているものが理解できないなど。

飲み込みの障がい

嚥下や咀しゃくの機能が弱ると、誤嚥による肺炎や窒息の危険が生じます。